



2015年6月29日

アジアのインフラは一日にして成らず

公益財団法人 国際通貨研究所
開発経済調査部 主任研究員 福田 幸正

中国が主導する AIIB（アジア・インフラ投資銀行）を巡る議論がニュースを賑わせているが、そもそもインフラストラクチャーとは何か。

塩野七生はその著書『ローマ人の物語 すべての道はローマに通ず』の中で、古代ローマ人が考えていたインフラとは、後世への記念碑として遺すつもりで建てた構築物ではなく、「人間が人間らしい生活をおくるためには必要だから行った大事業」と定義している。ローマ街道しかり、水道橋しかり。近代に入り、道路（運輸）、水道に電気が加わったが、これらは代表的なインフラだ。

アジアのインフラ整備には、日本は ODA ローン（円借款）を中心にして多大な貢献をしてきた。その一部だが、例を挙げると次の通り。

日本の ODA ローンによるアジアのインフラ整備率（2010年現在）

空港		鉄道		電力		港湾	
ベトナム	85%	フィリピン	51%	インドネシア	62%	インドネシア	40%
タイ	76%	インドネシア	36%	マレーシア	53%	カンボジア	39%
マレーシア	62%	タイ	22%	ミャンマー	45%	ベトナム	37%

（出所）JICA 年次報告書 2014

これらの高い数値は、まさに日本がアジア諸国のメインバンクとしてインフラ整備に協力し、それが直接投資誘致を促し、そしてアジア諸国の経済成長を支えてきたことを物語っている。これは一朝一夕にして達成されたものではない。円借款が本格化したのは 1960 年代以降であるとする、実に半世紀に亘る息の長い営みの積み重ねの結果といえる。円借款の返済期間は 30 年以上の超長期に及ぶものもあるが、完済まで借り入れ側と日常的に緊密な関係が維持されることになる。そこから強固な信頼関係も培われていった。さらには、ハードなインフラが整備されるに伴い、それらを効率的に運営するための制度、すなわちソフト・インフラも着実に構築されていった。また、ハード、ソフト両インフラを支える人材の育成も図られてきた。

このように、日本はインフラ整備とは何たるか、インフラ資金の Creditor になることの意味などを、自らの成長体験とアジアのダイナミックな成長への貢献とともに体得してきた。そこが欧米の援助国とは決定的に違う。AIIB に対しては、日本は求められれば伝授できることは多い。

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。